

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果（概要）	教育 0-1
1. 医学部	教育 1-1
2. 医学系研究科	教育 2-1

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	教育活動の状況	教育成果の状況	質の向上度
医学部	期待される水準にある	期待される水準を上回る	質を維持している
医学系研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している

医学部

I	教育の水準	教育 1-2
II	質の向上度	教育 1-4

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- PBL チュートリアル教育では、チュートリアル部門会等ですべての課題、シナリオ等を検討している。また、学生や教員の評価結果に基づき、「PBL（基礎）」、「PBL（臨床Ⅰ）」、「PBL（臨床Ⅱ）」の内容を見直している。
- 教育企画室を設置し、医学科4年次生の全国共用試験（CBT）の結果や、医師、看護師、保健師及び助産師国家試験の合格状況等を調査・分析し、教育方法の改善、学生の指導に活用している。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 1、2年次に附属病院における早期臨床体験学習のほか、医療訴訟原告の遺族等、学外の講師による医療倫理教育に取り組んでいる。
- 海外の学術交流協定校との交換留学制度や International Federation of Medical Students' Associations (IFMSA) の短期交換留学生制度等を利用し、毎年度 20 名前後の医学科学生が、海外での臨床実習や基礎医学実習を行っている。
- 平成 24 年度から 4 年次末に CBT 及び客観的臨床能力試験（OSCE）への合格を義務付けており、教育企画室において CBT 試験等の成績不良者の分析を行い、教育担当理事のほか、卒業生である教員が、学生の卒業まで継続的に個別指導を行っている。

以上の状況等及び医学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）における医学科の CBT 試験の平均は 79.4%から 80.9%の間を推移しており、すべての年度で全国平均を上回っている。

- 医師国家試験の合格率は、平成 23 年度は 98.1%で全国 2 位、平成 26 年度には 99.1%で全国 1 位となっている。また、第 2 期中期目標期間における看護師国家試験の合格率は毎年度 100%、保健師国家試験はおおむね 95%以上となっており、平成 27 年度は 100%となっている。

観点 2-2 「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第 2 期中期目標期間の就職者のうち県内に就職した者の割合は、医学科では 49.5%から 64.4%の間を推移しており、看護学科では 66.1%から 85.9%の間を推移している。
- 医学科卒業生の就職先上司へのアンケートでは、「知識・技術を含めて研修医として満足すべき医療レベルを有しているか」については 79%、「疾患について科学的に考え、探究心をもって自ら勉強しているか」については 85%、「職場の医療チームの一員として良好な関係を保ち適切に働いているか」については 93%が肯定的回答をしている。
- 看護学科卒業生の就職先上司へのアンケートでは、「常に最新の看護学の知識・技術を学ぶよう努力しているか」については 64%、「医療チームの一員として良好な関係を保ち適切に働いているか」については 82%、「看護に対する社会的ニーズを認識し社会に貢献できているか」についてはおおむね 45%が肯定的回答をしている。

以上の状況等及び医学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 26 年度から自由科目として、医学科、看護学科に「国際サービス・ラーニング」を開設し、ニカラグアでの医療ボランティアとして参加することを可能とするとともに、旅費の一部を負担しており、参加学生数は、平成 26 年度は医学科が 9 名、平成 27 年度は医学科が 4 名、看護学科が 1 名となっている。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 海外学術交流協定校での臨床実習で単位認定を受けた学生数は、第 1 期中期目標期間（平成 16 年度から平成 21 年度）の 53 名から第 2 期中期目標期間の 79 名となっている。
- CBT 試験や予備校の模擬試験等の成績不良者に対する継続的な個別指導、学生同士のグループ学習の推奨等の取組により、医師国家試験の合格率は、平成 23 年度は 98.1%、平成 26 年度には 99.1%となっており、第 2 期中期目標期間における看護師国家試験の合格率は毎年度 100%、保健師国家試験はおおむね 95%以上となっている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

医学系研究科

I	教育の水準	教育 2-2
II	質の向上度	教育 2-4

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成 24 年度に 4 専攻から 1 専攻へ改組し、柔軟で機動性のある教育システムへ再編しており、分野横断的な研究指導を行っている。
- 平成 27 年度から助産学専攻科を大学院修士課程に改組し、助産師養成コースを設置することにより、高度化する周産期医療に対応できる助産師教育を推進するとともに、高度実践力及びマネジメント能力を備えた指導的立場に立つ人材の育成に取り組んでいる。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成 23 年度から、博士課程及び修士課程の学生に対して、学長や教育担当理事等が、研究内容についてヒアリングを行い、優秀な学生に研究費を支援している。また、国際学会への参加を奨励するため、旅費の一部を支援している。
- 博士課程において、基礎医学研究者コースでは、関連分野の基礎的素養と学際的な分野への対応能力の養成に、臨床研究者コースでは、臨床の現場で広く求められる応用力の涵養に取り組んでいる。また、修士課程の高度看護実践コースでは、クリティカルケア看護に関する高度な知識と実践能力の習得を目指し、教育を実施している。

以上の状況等及び医学系研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目 II 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）における博士課程の学位申請論文は、すべて国際誌に投稿され、インパクトファクター（IF）5.0 以上の国際誌に掲載された論文は 10 件となっている。
- 第2期中期目標期間の学位授与者について、修士課程は 8 名から 23 名、博士

課程は 22 名から 28 名の間を推移している。また、資格取得者は専門医が 63 名、認定医が 19 名、専門看護師（CNS）が 4 名となっている。

- 修士課程の学生への授業評価アンケートでは、「内容は興味を持てるものでしたか」については 98%、「教員は十分な知識を持っていると思いましたが」については 93%、「全体として満足できるものでしたか」については 84%が肯定的回答をしている。また、博士課程の学生への授業科目に対する授業評価アンケートでは、「内容は興味を持てるものでしたか」については 98%、「教員は十分な知識を持っていると思いましたが」については 100%、「全体として満足できるものでしたか」については 100%が肯定的回答をしている。

観点 2-2 「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 修了生の就職先について、博士課程では修了生の 60%程度が当該大学の教員となっており、次いで他の医療機関、教育・研究機関等となっている。修士課程では主に大学等の教育機関、病院及び行政機関となっている。
- 修了生の就職先上司へのアンケートでは、博士課程は「専門知識の活用」については 86%、「最新の医療知識・技術を学ぶ努力」については 93%、「専門職として周囲を啓発している」については 64%、修士課程は「専門知識の活用」については 70%、「最新の看護知識・技術を学ぶ努力」については 77%、「専門職として周囲を啓発している」については 59%が肯定的回答をしている。

以上の状況等及び医学系研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 24 年度に 4 専攻から 1 専攻に改組し、柔軟で機動性のある教育システムへ再編しており、分野横断的な研究指導を行っている。また、博士課程では、関連する医療機関と連携し、学生の受入や地域の医療機関に副指導教員を配置し、学内の指導教員と共同で研究指導を行う体制を構築している。
- 修士課程では、助産学専攻科を大学院修士課程に改組するとともに、平成 27 年度から助産師養成コースを設置し、高度化する周産期医療に対応する助産師教育を推進している。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第 2 期中期目標期間におけるインパクトファクター（IF）5.0 以上の国際誌に掲載された論文は 10 件となっている。
- 第 2 期中期目標期間における修士課程の修了生 83 名のうち、4 名が高度看護実践コースを修了し、CNS の認定を受けている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。